特攻会報

平成4年7月

第15号

〒102（新）
東京都千代田区九段南
4—3—7　㈶偕行社内
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話　03（3263）0851

編集人　田中賢一
発行人　最上貞雄

↑ 平成元年傘寿を迎えられたときの御容姿

竹田会長御逝去

体調御整はず自宅御静養中であったが、五月十一日逝去なされた。昭和五十九年会長に御就任以来、我々の行う特攻隊慰霊顕彰事業の精神的支柱となられ、春秋の慰霊行事に必ず御出席なされ、特に春の靖國神社では遺族に対し心温まる御挨拶を頂いた。また遊就館内の特攻隊展示室の整備にあたっても、御懇篤な御指導を賜わった。

← 平成3年3月24日、靖國神社における慰霊祭で遺族に御挨拶される。これが最後の御出席となった。

秋山紋次郎副会長御逝去

秋山副会長はかねてから世田谷特攻観音奉賛会の維持発展について、有志を糾合して尽力なされ、特攻隊慰霊顕彰会結成の推進力となられた。

竹田会長と同じように平成3年3月の慰霊祭御出席を最後とし、その後は療養に努めておられたが、去る6月4日逝去せられた。左の写真は上のものと同じ時、靖國神社参集所で、左より竹田会長、秋山副会長、一人おいて寺崎副会長。

会長就任のご挨拶

瀬島　龍三

去る5月11日特攻隊慰霊彰会会長竹田恒徳様が薨去され、洵に哀惜に耐えません。

次期会長問題で役員の方々より是非私にとの強いご要望があり、又竹田様とは公私に渉り深いお付合をさせていただいた関係もあり、熟考の上お引受け致しました。

特攻隊員が青春の身をもって決然体当り攻撃を敢行、国に殉じられた貴い事実は、将来永遠に伝えてゆかねばならないと思います。

これが為、本奉賛会のなすべき事業を更に検討し、出来ますことなら公益法人とし、末永く慰霊事業を存続させたいと考えます。皆様のご協力を切にお願い申し上げ、一言就任のご挨拶と致します。

平成４年３月22日
靖国神社

遺族　120名
来賓　59名
会員　349名

参集所に一杯になった参列者

鈴木理事長

祭文

謹みて特別攻撃隊殉国烈士の御霊に申上げます。

我が国運を賭けて戦った大東亜戦争に於て、未曽有の国難を打開するため幾多の肉弾戦が実行されるや、皆様方には当時弱冠十七八歳から二十歳代初めの春秋に富むお年であられながら、最愛の肉親への恩愛を断ち切り進んで特別攻撃隊員となられて、身命を祖国に捧げられ一片の肉片すら残すことなく散華されました。

その誠忠遺烈により全軍将兵の闘魂烈々として燃え上り、又国を挙げて総ての国民が感泣したのでありました。

しかして遂に終戦を迎えそれから四十七年を経た今日、日本が空前の復興発展を遂げたことは英霊のご加護によることであり、私どもとしましては少しでもそれに報ゆる為に、祖国日本を今後ともしっかりと守り続けることを肝に銘じ、愈々精進を重ねて参ることをここにあらためてお誓いいたします。

本日第十四回特攻隊合同慰霊祭にあたり、御遺族はじめ関係者ここに相集い、神鎮まる英霊に対しまして心から敬弔の誠を捧げます。何とぞ今後とも英霊安らかにおわしますことを

平成四年三月二十二日

特攻隊慰霊顕彰会　会長　竹田恒徳

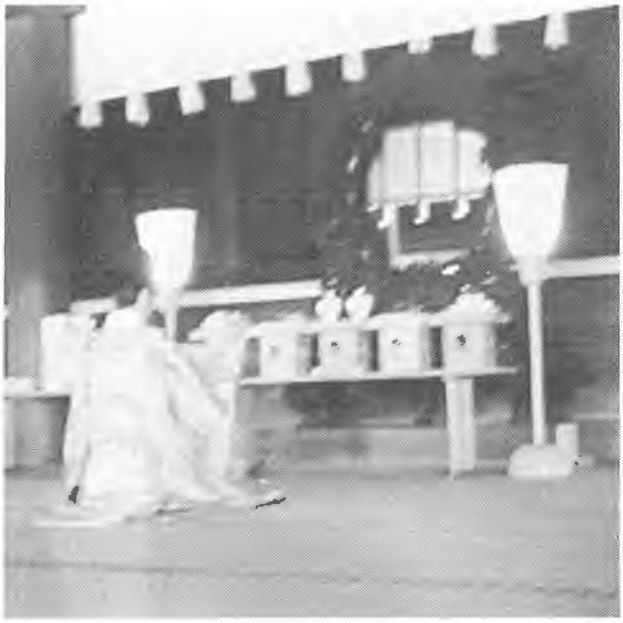
祭文奏上　竹田恒徳会長は健康を害され、御欠席のため高橋正次副会長が代読

献吟　吟　石橋　一歌
笛　佐伯しづか

目次

特攻隊合同慰霊祭　2
知覧特攻基地慰霊祭　4
神鷲は征く　浅井達三　6
油絵展　11
「特攻」を読んで　飯田佐次郎　15
散華　八牧美喜子　15
特攻隊の思出　少飛会　16
特攻隊を彷彿させる短歌　19
鳥浜トメさんの葬儀　19
学友が語る牧野顕吉君の戦死　岩田辰夫　20
特攻戦死した同期のことなど　菱沼俊雄　22
白鷗慰霊祭　15　義烈慰霊祭　24

東瀛に　狂瀾怒濤　風　荒れて
　誰か救はん　我立たずして
奔流を　一臂支うる　術なきも
　なき数に入る　あずさ弓われ
ほのかにゆらぐ神鏡の　影にうかぶや　君が面
四十余歳のうつろいを　伝えんとして声ならず
咫尺に迫る　我が思い　幽明の境　なおあるか
社の杜に　からす啼き　あゝうつし世に我帰る



特攻出撃の歌　　森　武次

風寒き靖國神社の御前に万朶の桜いまだ開かず
一輪の咲く花もなく一輪の散る花もなき神の御前
隊長も隊員もみなうら若く小犬の愛撫常の如くに
潑剌と天地の生気みなぎらせ若き神々今ぞ出でます

海軍ラッパ保存会

噫一誠特別攻撃隊

作詩　津留　敦
作曲　伊藤正康

(一)
決戦迫るフィリッピン
祖国に殉ずる秋来たる
今命下る特攻の
任務に奮起ふ一誠隊

(二)
征きて還らぬ梓弓
一死必中敵艦に
玉と砕けむいづれ皆
思ひおくこと更になし

(三)
身辺装飾る物品はなく
持つは一つの誠心のみ
大義に生くる益良夫が
心楽しと死地につく

(四)
明日は死する身勇士等が
身体清潔むる床しさよ
香焚きしめて出陣の
武将に比べむ心境かな

(五)
敵撃滅の意気凄く
神技ぞ冴ゆる体当り
空母戦艦轟沈の
燦たる戦果見ずや君

(六)
あゝ南溟に春待たで
競ひ咲きたる若桜
その身は花と散りぬとも
薫れ八千代の後世までも
仰げ八千代の後世までも

作詞者は一誠特別攻撃隊隊長の津留洋少佐（陸士56期）の令兄、作曲者は同期生である。直会の席上前頁の献吟者がこの歌をうたい、参会者に多大の感銘を与えた。

第38回　5月3日
知覧特攻基地戦歿者慰霊祭

5月3日鹿児島県知覧にある特攻平和観音堂前に於て、恒例の慰霊祭が厳粛盛大に執り行われた。

晴天に恵まれ全国各地より千四百名に及ぶ参拝者で、さしもの超大型天幕も一杯になった。

読経の中に、知覧町長である知覧特攻慰霊顕彰会長東　敏見氏を始めとし県会議員、町議会議長、海上自衛隊第一航空群司令、鹿児島地方連絡部長、第12普通科連隊長、特攻隊遺族代表、偕行社代表、航空同人会会長、航空碑奉賛会会長、陸士57期生会代表、特操会代表、全国少飛会代表、鹿児島県少飛会代表、少尉候補者23期生会代表等による焼香、献花が行われ、続いて各代表より慰霊の辞が捧げられた。

4月22日に逝去された、特攻おばさんと愛称されていた、鳥浜とめさんの娘、赤羽礼子さん、孫の鳥浜義清さんが、各々位牌、遺影を抱いて参拝されたのが、特に人目を引き、ここ二、三年は車椅子で参拝されていた鳥浜とめさんの姿が目に浮び、人々の涙をさそった。

この特攻観音堂が建立されたのは、航空総軍司令官河辺正三大将、第六航空軍司令官菅原道大中将が、四体造った特攻平和観音像の一体を、是非知覧の地に奉安致したいと知覧に持参、鳥浜とめさんに依頼され、とめさんは町のことは私にまかせなさいと快諾、今日のこの立派な平和会館（特

攻遺品館）が建立され、参観者も四〇〇万人を突破しこの盛大な慰霊祭が執り行われるようになったことを思い、更めてとめさんのことと両将軍のことが思い出され、感謝の念で、目頭が熱くなった。

この地から出撃した特攻隊員の出身は、陸士、特操、幹候、少飛、乗員養成所と往時の操縦者の全出身別を網羅しているので、遠方からの参加者は、それぞれゆかりの人達であった。

式典の最後に自衛隊音楽隊の伴奏で全員、「加藤隼戦闘隊」と「同期の桜」の歌が高唱され、老兵達、感極まって涙を拳で拭う者が少なくなかった。

因に今年は初めて陸軍航空碑奉賛会々長47期岩宮満氏、航空同人会々長48期高橋正次氏が参列され、知覧町長も感激して前夜、偕行社代表54期最上貞雄、知覧奉賛会理事57期中村善治、前田鹿児島特操会々長、地頭薗鹿児島少飛会々長等を招かれ、町役場関係者と特攻関係施設、その運営等に渉り懇談大変有意義であった。（文責最上理事長）

往時の鳥浜とめさん

神鷲は征く

―神風特攻隊基地より帰りて―

報道班員　浅井達三

本稿は文芸春秋別冊、雑誌「大洋」の昭和二十年三月号に掲載された記事であります。浅井達三氏は支那事変より大東亜戦争、そして戦後の東京裁判とニュース映画カメラマンとして活躍され、現在は芸術院会員として映画史の編集に当って居られます。

支那事変当初より同盟カメラマンとして上海戦・杭州湾上陸・南京戦に従軍され、海軍陸攻隊の重慶爆撃には八回も参加されています。その後日本映画社に統一され、同氏の撮影した「日本ニュース」は全国民の士気を高揚しました。大東亜戦に入るや主として海軍航空部隊と行動を共にし、西は印度洋、南はソロモン、東はトラック、北はアリューシャンと全戦域をめぐられ、東京・トラックを往復すること十八回にも及び、飛行時間は二千余時間にも達しています。

ラバウル基地で出撃を見送る山本元帥、明治神宮外苑の学徒出陣、特攻出撃の関大尉、東京裁判等々、今も我々の眼底に残っている多くのニュース映画は浅井達三氏の手によるものであります。同氏は本会の会員でもあられ、毎月十八日の世田谷観音寺に於ける特攻観音月例法要には欠かさず参列しておられる方であります。

深堀道義

神鷲の顔

私はつい最近まで、神風特別攻撃隊附報道班員として、比島前線の基地に行ってゐた。

神風特攻隊の第一陣は、関行男大尉を隊長とする敷島隊の人々だった。あの時の出発の模様は、既に日本ニュースの畫面を通じて紹介されたとほりである。

私たちは、その後も、現地において、毎日のやうに、相次ぐ神風隊の命名式や、発進の情況を撮影して来たが、その度毎に、異常な感動にうたれたのであった。支那事変以来、今日まで、ほとんど内地の生活も忘れたくらい、次から次へと転々として戦場を駈け廻って来た自分であるから、長い従軍生活の間には、随分感激的な事件や場面にもしばしば遭遇してゐる。しかし今度神風特攻隊に従軍して経験したやうな、あんな強い感動にうたれたのは、初めてのことといっていい。恐らく終生この感激を忘れることは出来ないだらうと思ふ。

その人たちは、数時間の後には、必ず死ぬときまった人なのである。私は戦地においてたくさんの勇士の写真を撮した。そのうちには、すでに護国の神となった人もたくさんある。しかし今度の神風隊の勇士のやうに、初めっから絶対に生還することのないとわかってゐる勇士を撮ったことは、初めてであった。

関大尉もさうであったが、誰も彼も皆んな平気な顔をしてゐるのである。唯一人として興奮する者はないのである。おそろしく明るい、日常の顔なのである。あのやうな陰も曇りもない顔といふものは、努めてしようにも出来る表情では絶対にないと思ふ。ましてや彼等は今数時間の後にはことごとく死んで行ってしまう人たちなのである。

――さうと、はっきり承知していてカメラを向ける私たちの心は、彼等の顔が明るければ明るいだけに、なほさら苦しいものであった。思はず胸がいっぱいになって来て、涙に曇る眼を伏せたことさへあった。それほど殆ど信じられないくらいに平然として、明るく、淡々と、無雑作に飛び立って行った人々であった。まるで二、三時間余りの後にはまた先刻と同じ澄みきって明るい微笑をたたへて還って来るかとさへ思へたほどであった。

だが、彼等は一人として再び私たちの基地に還っては来なかった。予定通り必死必中の体当りを以て、愛機もろとも敵艦に突入してしまったのである。

私たちはほんたうに涙にくれながら撮影したのである。言ひたいことは、ただひと言だけであった。済まない――。済みませんと、手を合はし伏し拝みたい気持でいっぱいであった。

命名式

ある朝、司令部から電話がかかって来た。特別特攻隊の命名式があるからとの知らせであった。直ちに撮影機を準備して、式場に馳せつけた。式場の芝生の上にはすでに特攻隊員全員の集合が

終っていた。

午前十時、比島方面海軍航空隊最高指揮官が、幕僚を従へて式場に到着された。敬礼の後、直ちに命名式がとり行はれた。

――第二神風特別特攻隊、忠勇隊、義烈隊、純忠隊、至誠隊、誠忠隊、右命名す。昭和十九年十一月〇日　比島方面海軍航空隊最高指揮官。

簡単ではあったが、一語一語力のこもった厳粛な言葉であった。つづいて一同に対し別れの挨拶を送られた。私は今でもあの時の最高指揮官の心中を思ふと、身内を引き締められるやうな云ひやうのない感激を覚えずにはいられないのである。我が子にも等しい最愛の部下に、二度と再び還ることなき必死必殺の攻撃命令を与へる最高指揮官の胸中は、どんなにか辛い、苦しいものであったことだらう。――その時の指揮官の挨拶の大要は、次のやうなものであった。

「特別攻撃隊こそは、我等皇国軍人たる者の最高至上の御奉公の道である。皇国軍人のみに与へられた最後にして且つ最上の道である。我等皇国軍人が、一人残らず、ことごとく諸子と同じく特攻隊として戦う時、日本は必ず勝つ。今戦っている作戦こそ、皇国大日本の運命を決する真の決戦であるから、断じて我々は勝たねばならぬ。諸子が今や最後最高の道を進んで御奉公する時、我々は必ず勝つことが出来るのである。敵米英には特攻隊はあり得ない。彼等のよくせざるところを以てして勝てぬといふ道理はない。特攻隊の戦法こそ、如何なる敵と雖も撃砕してやまぬ必死必中必殺の攻撃法である。この不撓不屈の攻撃精神で勇猛邁進しさへすれば、日本は必ず勝つと断言する」

勇士たちは、最高指揮官の口から発するこの最後の訣別の言葉を、一語たりとも聞き洩らすまいとして、緊張していた。式場の空気は、水を打ったやうな厳粛な静寂の中に顫えてゐた。私は夢中になって撮影をつづけた。指揮官は更に言葉をつづけた。

「諸子は真に皇国大日本の大国難を救う一人一人であって、既に護国の神の心になりきった尊い勇士である。私は指揮官として、諸子の戦友を代表し、一億国民を代表して、厚く感謝の意を表するとともに、必ずや諸子に続かんことを誓うものである。」

最後のこの一言は、特に一段と声を強めて、かう結ばれた。神鷲たちの面には腹の底からなる烈々たる決意の色が漲って見えた。それは断乎米英撃たずんば已まじの熱火の如き烈しい怒りの迸しりであった。

挨拶が終ると、式場の横のテーブルを並べた席へ一同相寄り、最後の別杯が酌み交はされた。最高指揮官自ら神鷲たち一人一人に用意の日本酒をついで廻り。

「諸子の成功を祈る」といはれた。

感激の別杯を傾け終って、最高指揮官は隊員の一人一人と握手をして廻られた。ぢっと若い勇士の顔をのぞきこみながら、拝むやうにしてその手をぐっと両手の中に握りしめられた。

宿舎に帰って

命名式は終った。あとはもう出撃の最後の命令を待つのみであった。敵機動部隊の位置を確めに行っている味方索敵機からの連絡のあり次第進発の予定であった。それまでの時間を、一応宿舎に帰って昼食を摂ることになったので、私も撮影機を持って神鷲たちといっしょに宿舎に帰ることにした。

彼等が出発して行ったのは、それから凡そ二時間の後であった。

この出発直前の二時間、私は終始宿舎において勇士たちと席を同じくしてゐたが、彼等が今直ぐ決行しようとしてゐる壮途の余りにも尊く厳粛なのに圧倒されて、殆ど口もきけないやうな気持だった。何でもいいからあたたかい言葉をかけてその人たちを励ましもし慰めもし、いたはりもし、また何よりも先にその人たちの気高い神にも等しい犠牲的な壮挙に対し、心からなる感謝の言葉も捧げなければならないと思い、息苦しいほどの焦躁感にさへ捉へられながら、どうしても適当な言葉も話題も見つからない始末であった。私だけではない。同じ席にいた司令でさへもその間の時間の扱ひに困ってゐるやうに見えた。

あの時彼等に少しでも異常な表情があったり、挙動でも見えていたら、私たちの気持もどんなにか楽であったらうとかへりみるのである。悲痛な色でもあったら、却ってどんなに私たちは救はれたか知れないのである。しかし彼等は、初めにも書いたやうに、少しも大事な決行する前の人のやうではなかった。生死を超越したというか、悟り切ったというか、実にさりげなく、平々凡々な毎日の午後といささかの変りもなく、むしろ傍にい

る私たちの方が却って重苦しく切ない感情にとり乱してしまったやうなあんばいであった。

隊員の中には、私がかつてラバウルにいた当時に、一つ釜の御飯を食べ合って暮した旧知の海鷲も数人いた。

基地の空気は実に明るく、澄みきっていた。

私などの思い煩ひにはかかはりなく、隊員たちは何の屈托も不安もなげに話しあった。私もいつかその明るい空気に引き入れられてついつい数時間後に迫るこの人たちの運命も忘れて、一緒になって賑やかに談笑しあった。

話題はいつか銃後の生産のことに移った。

司令が、飛行機に取りつけてある受信用の真空管一つだって、大尉の俸給位もするんだぜ。発信用のになるとわしの俸給より高いさうだよ、といふと、皆んな目をまるくして、「そんなに高いものですか。おい、通信機は置いて行かうぢゃないか」といい出した。

「いいよ、いいよ。持って行け。そんなことは心配しなくても、銃後の生産陣も力一杯やってくれているから代りはどんどん出来る。大丈夫だよ」

と、司令が笑いながらそれをなだめていた。

話はそれからラバウルにゐた当時、皆んなで金を集めて献金した時のことになり、

「俺たちはもう金は一文も要らん。司令にお願いして、またあの時のやうに献金しようじゃないか。そしてうんと銃後の人に頑張って貰はうじゃないか」

「さうだ、有り金全部献金しよう」

と、たちまちにして全隊員の持ち金全部が司令の机の上に積み上げられた。財布ごと出した者もあった。白いハンカチに包んで出した者もあった。中には俸給袋そのままで出した者さへあった。見ていた司令が、

「財布だけは記念に御両親に送って上げてもいいぞ」ととめると、

「親に財布など送っていただくと、要らぬ心配をさせるだけですから、どうぞ送らないでいただきます」という。

そのうち隊員の一人が、

「司令、済みませんが、このピカピカする十銭玉一つだけわたしに下さい。三途の川を渡るのに、渡し賃が要るさうですから」

と、笑ひながらいった。他の隊員が、

「俺とお前は昔からペアーでずっと来た。俺の分の渡し賃も頼むよ」

「おウ、十銭ありゃ三人行ってもお釣りが来るよ」

献金の金を包むため隊員たちに背を向けていた司令の眼に、たしかに白い涙の露の光るのが見えた。私も思はず涙ぐみ、うつむいてポケットの煙草を探した。

今度内地に帰って来て、神風手拭の話を聞いた。あの手拭は、この時の特攻隊の勇士たちの献金で作られたのである。

隊員たちは、最後の思い出に、ペンを取り出して、思い思いの言葉を書きとめていた。私の持っていた万年筆を借りて書いていた者もあった。

忠勇隊指揮官の山田大尉は、紙の真ん中に、忠勇隊と書き、静かに眼をつぶっていたが、やがてその下に、

「無」

と書いた。

純忠隊指揮官深堀大尉は、

「腰の朱鞘は何するものぞ、人を斬るため、殺すため」

すらすらと書き終ると、にっこり私の方を見て微笑んだ。

「誠忠無二」と書いた者もあったし、

「静」

とただ一字だけ書いた者もあったし、また、

「にっこり笑って行かむ靖国へ」などと書いた者もあった。

いづれも若い自己の生命に対し、何の未練もなげな、淡々とした心境にあった。その澄みきった水の如き境地には、いささかの作為も見えず、虚勢の色もなかった。彼等にはもう何もすることがなかった。ただもう索敵機からの連絡を得ての最後の出撃命令を待つだけであった。皆んなうまさうに落つきはらって煙草を吹かしていた。鼾をかいて、いい気持に昼寝をしている者すらあった。

最後の食事

「司令――」

と突然一人の隊員が声をかけた。

「母艦、戦艦以外の目標に対しては、どうしたらよろしいか」

「それや勿論、見向きもせずに、母艦、戦艦だけに突込むのだな。そいつらが燃え出したら新し

い目標に向って行けばいい」
「全速出して突込んで行ったら、機体の強度はどうですか」
「〇百ノット以上のスピードが出るから、若しかしたら翼は皺がよるかも知れない」
「皺がよっても真直ぐ突込めますか」
「大丈夫、突込める」
「突込めますか。じゃア、全速で突込んで行かう」
思いなしか、一段と隊員たちの顔が明るく輝き出したやうな気がした。
別の隊員が、また訊いた。
「艦のどこが一番致命的ですか」
「母艦だったら艦橋だ」
司令が振りかへって答へた。
「戦艦だったら艦橋うしろ、第一煙突との間。そこへ突込め、致命的だ。まうしろからじゃ駄目だよ、煙突にぶつかるから、必ず斜めから突込んで行け」
「一発で轟撃沈しなかった時は?」
「火災が起きるよ、大破炎上だよ。とにかく敵はあわてるに違ひないよ」
「俺は蟲撃沈出来ない場合も考へて、いっぱい燃料を積んで行かう。それだけでも火災が大きくなるだろう」
「さうだ、それで行かう!」
と、皆んな叫び合った。
昼の食事は私も隊員たちといっしょの席で食べさしてもらった。彼等にとってはこれがこの世における最後の食事であった。烹炊所でも特に心を配って一所懸命に作った料理であったが、決して彼等の気高い壮途にふさはしいだけの十分の御馳走とはいへないやうな気がした。心のこもった食膳ではあったけれども、その人たちの今決行しようとしている仕事の大きさから見れば、あまりにも貧しいささやかな最後の食事といはねばならなかった。しかしこの若い神鷲たちは、まるでさうしたことにはかかはりなげに、舌鼓を打っておいしさうに食べていた。私は見ていてほんたうに涙ぐましくなって来た。何か手をついて伏し拝みたい気持だった。
山田大尉が深堀大尉にむかって、
「お前と俺とは学校の時からいっしょだったが、この二年間お互いによく転戦して無事だったなア、今度はしかしほんたうにお役に立つ時が来たよ」と、思ひ出したやうに云った。「全く二人ともよく無事で生きて来たよ。今度こそはしっかりぶつかろうぜ」
「思いきり突込んで行かう」
二人はいかにもうれしさうにうなづきあっていた。
山田大尉も、深堀大尉も、海兵〇〇期で、あの第一回神風隊の関大尉と同期であった。
食事が終っても、まだ時間があった。
深堀大尉が後藤中尉のそばに寄って、
「天草っていいところかい」と、話しかけていた。
「故郷はいいものだね」
後藤中尉の故郷は天草らしかった。突然故郷のことをいはれて、後藤中尉はちょっとしんみりしたやうな面持ちだったった。深堀大尉も後藤中尉の故郷の天草のことを話しかけたものの、心のうちではやはり自分の故郷のことが偲ばれるらしく、それ以上天草のことにもふれずに煙草を吹かしていた。
岡野中尉が剃刀を出して髭を剃り始めた。ながい間顔も洗はなかったらしく、髭ぼうぼうの中尉だった。
「閻魔様の前に出ても失礼にならぬやうにしておかなきゃあねー」といって笑っていた。
その傍の明るいところでしきりに頭の雲脂をおとしてゐる隊員がいた。随分頭を洗はなかったと見えて、おそろしくたくさんな雲脂だった。
「洗って行けよ」と誰かが云った。
「いや、風邪を引くと困るからな」といっていた。
「晴れの首途だ、俺はマフラを洗って行かう」
と、一人が汚れたマフラを脱した。
「今からじゃ出撃までに乾かんぞ」
「なあに、飛んでるうちには乾くよ」といって洗いに行った。

征きて還らず

〇時。司令部から電話で、遂に出撃の時が来た。私はハッと何か胸を衝かれるやうな思いであったが、皆んな平気で、元気よく、飛行場に整列した。
参謀、司令から、攻撃目標その他についての簡単な指示命令があり、終って山田大尉が隊員の前で、訓示した。
「皇国の興廃正にこの一戦にあり。只今から

吾々命を投げ出して敵機動部隊を攻撃する誉れの任務に向って出発せんとす。目標上空に達するまで、お前達は、命を投げ出しているからといって、敵の戦闘機の攻撃を受け、徒らに犬死をするな。飽くまで敵の戦闘機を警戒して、絶対に目的を達成するやう現場まで突込まねばならん。命を投げ出したからといって、油断してはならない。突込むまで敵戦闘機を警戒して行け。一番先に俺が行くから俺に続け。出発――」

轟々と各機のエンジンが鳴り響いていた。

総員たちは踵を返して無雑作にそれぞれの愛機に乗り込んだ。

車輪は静かに滑走路を蹴って進み出た。

一機、一機、相次いで飛び立って行った。私たちに飛行場の一角に立って、夢中になって帽子を振った。整備員も搭乗員も、残った人々はみな千切れるばかりに帽子を振って、大いなる神鷲たちの成功を祈りつつ、還ることなき彼等の壮途を見送ったのである。

一機、一機、次第に基地の空遙か彼方に機影を没して去って行った。もうすっかり見えなくなってしまってからもまだ動く者はなかった。いつまでも、いつまでも帽子を振って立っていた。青い青い空が高く澄みわたっているばかりであった。私は何かしら物足りないやうな気がしてならなかった。もう少しは何か感激的な異常な場面があってもいいやうな気がした。あまりにも彼等はさりげなく無雑作に出て行ってしまった。それっきりもう還って来ない人たちとは信じられないような気持さへした。何だかまた数時間の後には還ってくるような気がして来た。山田大尉も深堀大尉も、間もなくにこにこ笑いながら還って来るのではないかしら。そんな風にさへ思はれて来て、いつまでも彼等の飛んで行った明るい空の輝きをじっと見つめていた。しかし、彼等はつひに還って来なかった。

洗ったマフラは突入するまでに乾いたであろうか。濡れたままのマフラを首に巻いて愛機の傍に走って行った姿が今もまだ眼に見えるような気がする。何という人であったか、名前を聞き洩らした。

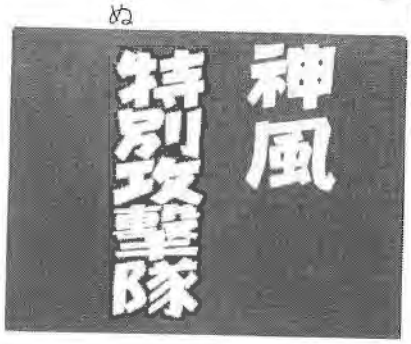
明るい基地

その後も私たちは何回となく神風隊の出撃を送った。皆んな皆んな若い元気な海鷲ぞろいであった。最後の日まで私はいつも彼等と愉快に暮した。罪のない馬鹿話に打ち興じたり、思いきり声を張りあげて歌いまくったりして愉しく生活した。私は柄にもなく歌を作った。一夕皆んなの前で披露すると、大喝采だった。皆んなたちまちに歌詞を覚えて、声を揃へて大いに歌った。

花のつぼみを廿歳(はたち)で散るも
何か惜しかろ国のため
征くぞ神風特攻隊
九機編隊雨雲衝いて
怒濤逆捲くレイテ湾
征きて還らぬ特攻隊
征くというたが還るといはぬ
男首途の晴れ姿
その名神風特攻隊

白頭山節の節をそのままに失敬して歌ったので、簡単であった。歌へない者は一人もいなかった。しかし彼等は本当はどんな気持で歌っていたのであろう。今思ひ起してみても、彼等はほんたうにもう神の心になってしまっていたように思へる。あの邪心のなさ、あの明るさ。何の不安も、動揺もない。未練もない。

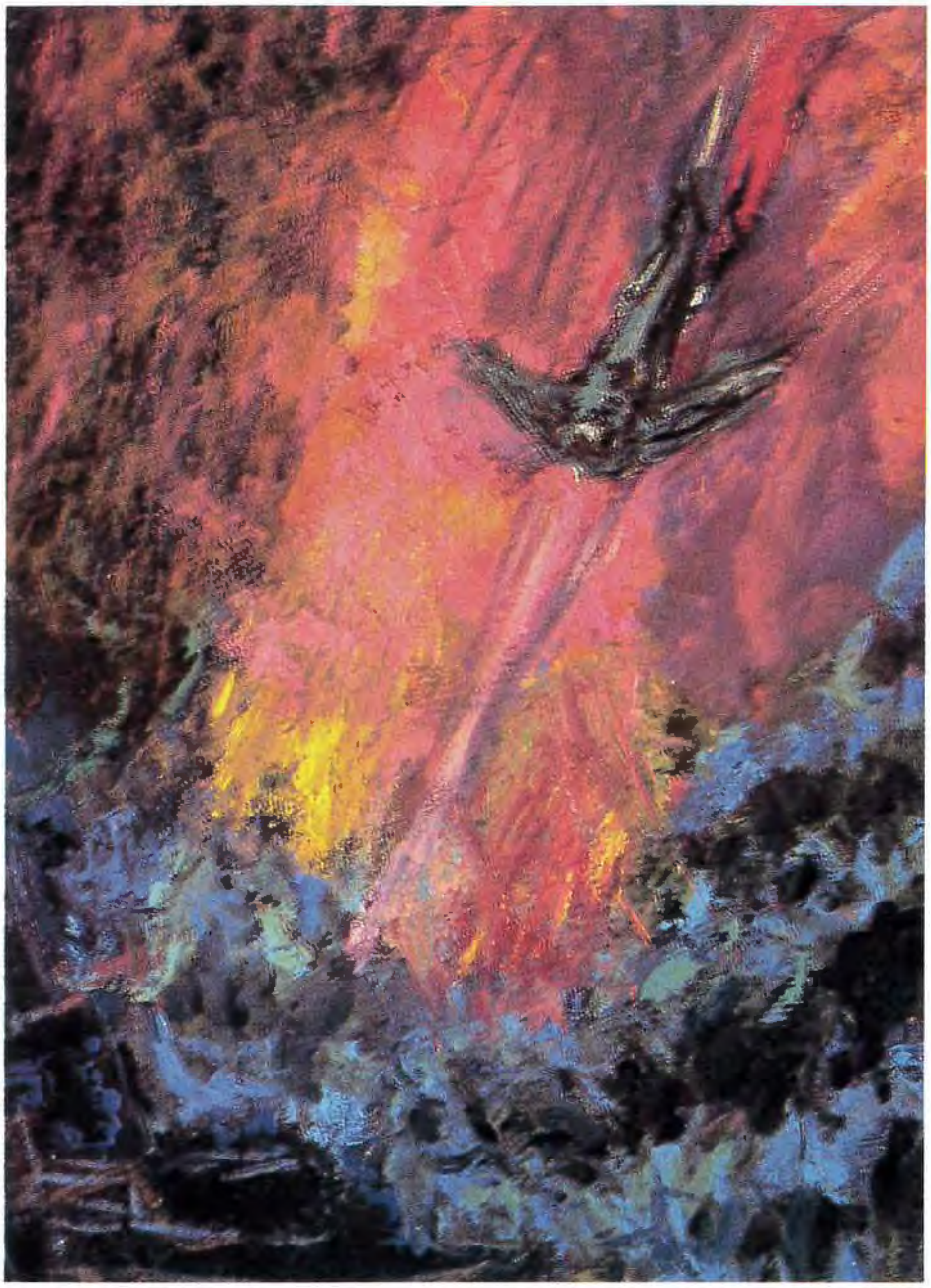
私たちと同じ人間として見るには、あまりにも生死を超越してしまっていた。しかしまた神といってしまうにはあまりにも人間らしく、明るく、賑やかに、無邪気な人たちばかりであった。



19・11・9ニュース映画

会員の描いた特攻隊

平成三年秋の世田谷特攻観音における年次法要と、平成四年春の靖国神社における合同慰霊祭に、これらの油絵を展示し慰霊顕彰の灯と致しました。私共は余技で彩管を握っておりますが、特攻隊員に対する景仰の念において人後に落ちない積りであります。皆様の御指導をお願いすると共に同好の士を求めます。理事　松本武仁



西野弘二　80号

炎の特攻隊

赤き焔のその面に
飛竜一火の眼差しは
とどめさすべし敵艦を
今や諸共花と散り
黒き海潮血ぬりつゝ

正しきもの来たれ
清きもの来たれ
強きもの来たれ

人生二十年夢幻の
幼き日　少年の夢　若き生命
父おわす　母おわす　故郷の森は
想はめぐる
つきせぬ想めぐりめぐる

義烈空挺隊出撃に際し郷里に別れを告げる

昭和20年5月24日、熊本健軍飛行場発進沖縄に向った。　松本武仁　20号

ベンガル湾上岡森攻撃隊の悲運

昭和18年12月31日、飛行第12戦隊の岡森大尉率いる97重6機はラムレ島砲撃中の英艦隊を攻撃に向ったが、スピットファイヤー30機の攻撃を受け全機撃墜された。

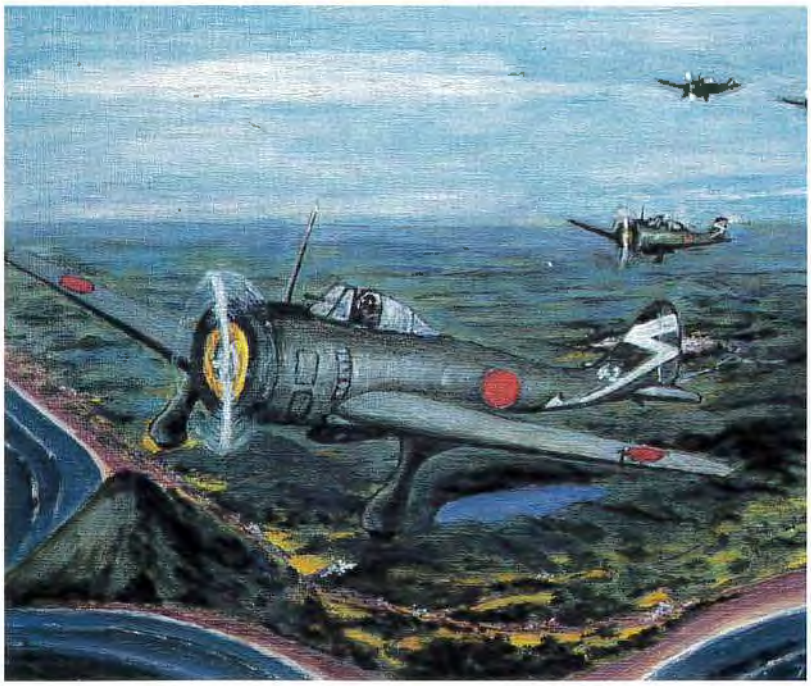
伊藤直之　20号

精華特別攻撃隊敵艦に突入

精華特別攻撃隊の村山光一軍曹（少飛10期）は、昭和19年12月20日ミンドロ島サンホセ沖の敵艦船攻撃に向かい、P－38の攻撃を受け火達磨となったが敵艦に突入これを撃沈した。左上の掩護機は久永博軍曹（少飛7期）であるが、同軍曹も敵駆逐艦に突入してこれを轟沈した。

海法秀一　10号

知覧を出撃した第42振武隊



昭和20年4月6日菊水第一号命令により「第42振武隊猫橋隊長(57期)以下10機知覧を出、途中喜界島にて燃料補給、嘉手納湾の敵艦船に突入せよ」との命により知覧より出撃した。

中野友次郎　8号

回天出撃

市川国雄

昭和20年4月3日回天特攻多々良隊を乗せて大津島を出撃するイ44号潜水艦　20号

陸軍船舶特攻㋹

松本武仁　20号

海上挺進第一～三戦隊は慶良間諸島に、第26～29戦隊は沖縄本島南部に展開、敵の侵攻を迎え好機に乗じて特攻出撃、多くの損害を与えた。

「特攻」を読んで

飯田佐次郎

(一)

特攻第十三号に義烈空挺隊奥山隊長以下、隊員の辞世遺言が掲載されました。戦後四十七年になる今日でも隊員の残された文字を読む時に胸に強く響いて来ました。隊員のご遺族がこれを読んだ時、涙新たなものがあると思いました。

特攻勇士の遺言辞世に感激したので「特攻」第一号から第十一号迄を再読して、辞世遺言を探したのですが意外に少いのに気がつきました。特攻隊員の戦死者は六千余人ですから今迄には、戦隊史追悼録には沢山掲載されていた事と思いますが「特攻」に投稿が少なかったのでしょう。

これからは遺族や戦友の方々の投稿に依て「特攻」の発行される度に、遺言辞世便りの欄に掲載して頂き特攻勇士を偲び度いと思いました。

なお靖国神社は毎月発行の社報「靖国」の最終頁の上段に、遺言辞世便りが掲載されていますので「特攻」にも是非掲載をお願い申し上げます。

(二)

「特攻」第九号と第十一号で昭和20年5月佐賀県鳥栖市鳥栖小学校の音楽教室を訪ねて、上野先生に会った二人の音楽学校出身の特攻隊員の消息を上野先生が探している記事が掲載されていました。

音楽を愛し出撃の前に楽しくピアノを弾いた、特攻勇士の凛々しい姿は、その昔、一の谷の戦いに敗れて青葉の笛と共に散った、平家の若武者敦盛を思出すのでした。一日も早く上野先生に消息をお知らせして、特攻で戦死ならば、ご冥福を祈って下さるでしょうし、無事生還していたならば再会して喜んで頂きたいと思います。二人の特攻隊勇士の消息がわかります様にお祈りしております。

散華

八牧美喜子

私の住む原町市の桜の名所は、野馬追祭の祭場地、本陣山地つづきにある。

戦争末期、病弱の私は家に籠っていた。そんな私を遊びに来ていた航空兵が「春になったら本陣山に連れてゆき元気にしてやるよ」と約束したが、その約束は果たせなかった。まもなく特攻隊員の命令が来た。出発前夜、永遠の別離を告げに来た彼は言落少く、私も語る言葉を失い琴を出し「さくら変奏曲」を万感をこめて弾いた。彼は比島に「散華」した。

戦が終り桜は何事もなかった様に咲いた。病弱の私は残り散る花をあびながら亡き人を心に浮かべた。私に桜は亡き人の思い出が添う。こうして戦を経るごとに桜の散りぎわの美を愛する日本人の桜主観が形づけられてきたのだろう。古今集から連る思いに昭和もまた忘れられない桜の思い出を幾筋か加えた。

さくらどき簞笥に古ぶ紅花染
ハンカチのいつか失せをり桜狩
戦友といふ男らの花筵
花吹雪渦なしてをり陶祖の碑
布かぶり木魚の座る花の寺

社団法人白鷗遺族会 平成四年度春季戦没者慰霊祭行わる

白鷗遺族会（海軍飛行予備学生の会）の第八十八回の戦没者慰霊祭が4月12日（日）午前11時より靖國神社で挙行され、水交会や海空会とともに本会からも理事長が参列した。御遺族と生存会員を含め約一、〇〇〇名に及ぶ参拝者で慰霊祭は盛り上り、六期理事川橋省三氏の祭文奏上に感銘した後「同期の桜」が涙にくれて斉唱された。終って社奥の相撲場で定期総会、引き続いて懇親会が行われ、海洋吹奏楽団の演奏と歌曲が和楽のムードを盛り上げ、午後2時半大成功裡に閉会した。

飛行予備学生は昭和9年発足より終戦に至るまで入隊者数一四、五四一名を数え、戦没者二、四七二名に及ぶ。そのうち特攻戦死者六五三名を出し、これは特攻戦死海軍士官総数の八五%を占めるという。その尊い犠牲と輝かしい勲功には哀悼と敬仰の念に打たれ、心から御霊安かれと祈った。

（鈴木　記）

特攻隊の思い出

〔陸軍少年飛行兵　十三期生の歩み〕

若桜隊（99双軽）の攻撃

㈠　若桜隊の概況

昭和19年12月15日、フィリピンのリパ飛行場にいた飛行第75戦隊で二回目に編成された特攻隊である。十三期生から時本清舟、七楽吉夫、藤沼喜一の三名の伍長が選ばれている。隊員には他に、隊長津田少尉、余村郎伍長、池田伍長の三名がいる。

レイテ島周辺の敵艦船に対して、余村伍長機（少飛十二期）が昭和19年12月20日レイテ湾に突入している。

ルソン島のリンガエン湾上陸をめざす敵艦船群に対して、時本伍長、七楽伍長、藤沼伍長の三機が昭和20年1月6日リンガエン湾において突入している。

津田少尉、池田伍長の二名については生存しているが詳細不明である。

㈡　若桜隊の編成

昭和19年12月15日、ルソン島、リパ飛行場の軽爆第75戦隊の留守隊では、二回目の特攻隊が編成された。

これより先、土井戦隊長が、海老根大尉に特攻隊を選出させ、四航軍司令部に転属することを命じていた。指名されたのは時本清舟、七楽吉夫、藤沼喜一、余村五郎、池田の五名で、いずれも少年飛行兵十二、十三期生であった。海老根大尉は各中隊先任者を通じて五名の伍長に転出命令を伝えた。午後になって五名の伍長は出発準備をととのえて本部に申告にきた。海老根大尉が隊部長に代って申告をうけた。

五名の若い伍長を一隊とする特攻隊は、のちに若桜隊と命名された。

㈢　二人の特攻兵（時本清舟、七楽吉夫）

土井勤　飛行第75戦隊長　中佐

前文省略

たしか昭和20年1月5日の午後のことであった。

私は戦隊本部の部下十数名とともに、マニラの海岸通りのアドミラル・ホテル（当時の航空寮）の一室に陣取って、比台間輸送の準備に忙殺されている時である。

若桜特攻隊として我が戦隊から転出させた五名の下士官のなかの二人の伍長が、私に挨拶をしたいと言ってたづねてきた。聞いて見ると、明朝6時にリンガエン湾の敵の船団攻撃に向う予定なので、その前に戦隊長にお別れの挨拶に来たのだという。私はハタと当惑した。心の中は彼らに会い度くない気持で一杯であった。

つい十日くらい前の、ネグロス島の第一線で死闘していたときと、いまは全く情勢が違うのである。当時は、我々自身が泥沼のような苦闘を続けていて、明日の生命も知れない状況の中に身をおいていたので、死ぬとわかっている特攻隊員と会っても少しも気の引けるところがなかった。だが今は違う。我々は比島における激しい戦闘任務を終って、ひとりひとりが生命を大切に内地に帰還するのが第一の任務となって来た。死ぬことをもって任務達成の手段とする特攻隊とは大変な違いとなってきたのである。

しかし私は彼らと会わない訳にはいかなかった。私は副官に命じて二人を部屋に呼んだ。七楽伍長と時本伍長であった。二人とも少年飛行兵の第十三期生でことし十九歳の少年であった。

「明朝6時、カローカン飛行場（マニラ郊外）を出発、リンガエン湾を攻撃することになりましたので、戦隊長殿にご挨拶にまいりました」

と悪びれもせず、けなげに報告した。まったく可愛想で、いぢらしくて正規にたえない。私はかれらの郷里と家族の状況を、副官に詳しく書きとらせた後、心しづかに準備をするように慈愛をこめて訓示した。

二人は素直にうなづいた。その態度が又なんともいぢらしくて、私が胸につかえたままあとの言葉が続かなかった。私はここで、かねてから考えていた特攻隊に対するはなむけの言葉として、「悠久の大義に生きよ」とか、「大和魂の権化なれ」という型にはまった、きまり文句のような言葉を口にする気にはなれなかった。私が彼らのほんとうの父親だったら、このさい何が言えたであろうか。やはり、「あとのことは心配するな、しっかりやってくれ」という以外は外にどんなことが言えたであろうか。

私は副官に彼らを出来るだけご馳走してやるよ

うに命じて、二人を部屋から去らせた。

まもなく別室で、彼らの先輩にあたる下士官の声にまじって、軍歌を唱う二人の伍長の若い声が聞えてきた。

私はこれでよいと思った。しばらくすると、古参の下士官が私のもとにきて、若い二人が是非戦隊長と乾杯したいと希望していることを伝えて私の出席を促してきた。

私は観念してやおら腰をあげ、設けられた席について。そこは乏しいながら酒もご馳走もそろっていた。わずかの酒でよい気嫌になった二人は、ただ声をからして若々しく歌うばかりであった。

明日を限りの命の二人に、私は一体何を話すべきか、未来のことを話すのはもちろん、過去の楽しい話をしても、彼らに取ってはそらぞらしくむなしいものに聞こえるのではないだろうか。私は迷った。軍歌だ、こういうときの何よりの救いは軍歌があるだけだ。

「広い飛行場にたそがれせまる、今日の飛行も無事でした、塵にまみれた飛行服脱げば、可愛いあの娘のマスコット」からはじまって

「貴様と俺とは同期の桜、同じ鋅田の枝に咲く、咲いた花なら散るのは覚悟、見事散りましょう国のため」などの歌が、感激にのって次から次へと歌われた。

最後には「男なら」の歌であった。歌に興味を持つ私は、昨年出征以来だれからともなく聞き覚えたこれらの歌をこよなく愛唱した。特に「男なら」は自己流に文句を綴り合せたつぎの二節が好きであった。私は自己流の勇しい身振にあわせて、この二節を力強く歌った。

「男なら男なら、未練のこすな浮世のことに、死ぬが男の意気地じゃないか、抱いた爆弾体当り、男ならやって見な」

「男なら男なら、離陸したのがこの世の別れ、笑ってゆくのが男じゃないか、空母戦艦見つけたり、男ならやって見な」

もう誰も酔ってはいなかった。なんとも快い感激がその場にただよっていた。私はせい一杯その感激にひたった。そして、若い二人がこの場のさわやかな感激を抱き続けたまま征ってほしいと思っていた。

私はもう二人の顔を見ていることがつらくなってきた。まだ童心のぬけないように見える若い二人は、なかなか自分から帰ろうとは言いださない。夕暮れが暗く窓外に立ち込めて来た。私は年寄役だけにいやな役目を買ってでなければならなかった。

「明朝の出発が早いようだから、そろそろおひらきにしよう」私はこういって彼らの帰隊をうながした。彼らは素直に私の言葉にうなづき、元気な口調で別れの挨拶をのべて席をたった。

私は宴会中、終始二人に、戦隊が唯今内地に帰還準備中であることを、おくびにもださないようにそれとなく心をつかっていたが、どうやら彼らが満足そうに席を立ったのを見てほっと一安心していた。

ホテルの外には彼らをカローカン飛行場に送るトラックが待っていた。見送りに出た十名あまりの戦隊員と、ひとりひとり別れの握手をして二人は車上の人となった。

トラックが動き出そうとしたとき、二人の特攻隊員の口から出た言葉はなんであったか。

「戦隊のみなさんも、内地に帰って、任務のためがんばってください！」

私ははっと思った。ああ、やっぱり知っていたのか、可愛想に。

一同が瞬間はっとして、じっと二人を見守る中を、彼らを乗せたトラックは、灯火管制中の真っ暗なマニラの街の闇の中に静かに消えていった。

あとがき

前文省略

後年になって、私は戦史室発行の記録によって、二人が昭和20年1月6日、リンガエン湾の敵艦隊に突入戦死したことを知った。

後文省略

㈣　遺品家族の許に届けられる（藤沼喜一）

昭和60年4月7日、愛知県幡豆町三ケ根山で、飛行第75戦隊関係者の慰霊碑の除幕と、五輪塔開眼供養に、遺族を招き慰霊祭が行われた。

その際、河辺曹長が、昭和20年1月初めころフィリピン・リパ飛行場で、若桜隊員藤沼喜一伍長から、「操縦徽章と航空胸章を家族に渡してほしい」といわれ、預かっていたものを、遺族で出席された藤沼伍長の弟藤沼敏夫さんに手渡すことができた。敏夫さんは、「今まで亡き兄の遺品が何一つなくさびしく思っていたが、この遺品をいただきほんとうにうれしい」と感謝していた。

思えば、四十年振りに遺族の許に届けられたのである。

八紘第11隊皇魂隊（2式双襲）の攻撃

(一) 皇魂隊の概況

昭和19年10月末ころ鉾田飛行校で編成された。十三期生から入江千之助、寺田増生、利光勝義、小平昭、吉村正夫の五名の伍長が選ばれている。隊員には他に、隊長三浦恭一中尉、桑原金彦少尉、門口燁夫少尉、倉知政勝曹長、渡辺力軍曹、春日元嘉軍曹の六名等がいる。

この隊は、フィリピン、ルソン島リンガエン湾上陸をめざす敵大艦船群に対し、昭和20年1月6日に春日軍曹機が突入し、同月8日には三浦中尉、倉知曹長、寺田伍長の三機が突入し、同月10日にも入江伍長機が突入している。

敵機の空襲で機を失った桑原少尉、吉村伍長の二名は生還したが小平伍長は戦死したものと認められる。利光伍長は空襲で負傷し戦死している。門口少尉、渡辺軍曹については詳細不明である。

(二) 教官の仇討ち（寺田増生）

昭和19年11月29日午前10時、皇魂隊の双襲十二機が鉾田飛行場を出発した。出発前に今西師団長に申告して、握手を交した寺田兵長は、「必ず岩本大尉の仇を討ちます」とほどばしった。

岩本大尉は、十三期生双襲隊の教育隊長から万朶隊の隊長に選ばれている。隊長以下将校四名は、昭和19年11月5日、フィリピン、リパ飛行場到着後、マニラのニルソン飛行場にあった四航軍司令部へ申告のため双軽で出発した。途中、バイ湖上空付近で敵グラマン二機の攻撃をうけて戦死している。特攻出撃を間近にして無念の死をとげた岩本大尉に代って、敵艦船に見事突入して撃沈させることが仇討ちであり、それを遂げますと誓ったのである。

この姿に接した美藤副官は次のように詠んだ。

教え子は一歩進みて答えけり
岩本大尉の讐討ちやまんと

(三) 利光勝義の戦死状況

アメリカ空軍のルソン島各基地に対する空襲も一層激しさを加えた。このため、クラーク中飛行場にいた皇魂隊からは犠牲者が出た。その状況を目撃した独立第51飛行場中隊、高射機関砲小隊の森田一郎兵長は、次のように記している。

昭和20年1月4日午前10時ごろ、いつもの通り高射砲陣地で作業なすませ、戦友と話をしていると、川口整備兵が通りかかり、東のアラヤット山のふもとを指差し、「あれは何だ」と大きな声でどなる。

見れば数多くの飛行機が一列横隊に並んで私たちの飛行場へ来るのではないか。我々はびっくりして壕の中へ飛び込んだ。見る見るうちに飛行場の空は敵飛行機に覆われ、花が咲いたように落下傘爆弾の集中攻撃で我々の陣地から手も足も出ない。やがて、地上の対空兵器が火を吹いた時には、すでに敵機はほとんど飛行場の上空にはいなかった。全く一瞬の出来事だった。

その時、森の向うから「特攻隊の下士官がやられた」

という声と同時に担架で運んで来る姿が目にうつった。すると、反対の方向にある国道に一台の立派な乗用車がとまった。見ると皇魂隊長の三浦中尉が刀を握りしめて向ってくる。何でも本部へ打合せのため単身赴いていた由、息せききって担架の方へ向われる。「利光伍長しっかりしろ」三浦中尉は駆けよると、可愛いい部下を抱きかかえるようにして心配顔にのぞき込まれる。皇魂隊の整備班長高橋俊夫少尉も重傷を負った。

「これからサンフェルナンドの病院へ連れて行かねばならないが誰も同行する者がない」とつぶやかれる。私は見るに見かねて、「隊長、私でよかったら案内します」、「君行ってくれるか」班長の粥川軍曹には中尉より了解を得てもらって早速乗用車に乗り込む。

サンフェルナンドまで約四十km・時間ほどの行程だが、またいつ敵の飛行機が襲来するとも限らない。私は乗用車の外に身を乗り出して対空監視につき、やがてサンフェルナンドの兵站病院へ入る。利光勝義伍長の負傷は腹部足等を落下傘弾でやられたらしい。大変な重体であった。後で聞いたのだが利光伍長も不帰の客となった。

(四) 皇魂隊の出撃

1、一回目は、昭和20年1月6日春日軍曹のルソン島リンガエン湾攻撃である。（七編四の(三)、旭光隊と皇魂隊の出撃を参照のこと。）

2、二回目は、同月8日午前6時40分、皇魂隊の四機が出撃した。一番機隊長三浦中尉、二番機寺田伍長、三番機倉知曹長、四番機入江伍長であった。

入江伍長がリンガエン湾上空に到達したのは、先発機よりかなりあとであった。朝の光で明るくなった海面には二ケ所に高く火柱があっていた。

大型船が炎上しているようであった。海面の至る所に大小の艦船が浮かんでいた。

だが、その上空をグラマン戦闘機の編隊の数群が旋回しながら警戒していた。アメリカ空軍は、日本の特攻機の来襲に備えて防御を一層厳重にしたらしかった。入江伍長機が一機で突進すればたちまち撃墜されるのは明らかであった。入江伍長機は突進をやめて引返した。

3、三回目は、同月10日午前中、リンガエン湾内には、連合軍の艦船が三〇〇隻から三五〇隻もいて活発な揚陸をつづけていた。このほか、後続の艦船団がリンガエン湾に向っていた。

2式復戦の皇魂隊からは入江伍長機が出撃した。一昨日の八日、リンガエン湾上空から引返した入江伍長機が皇魂隊ただ一機の操縦者となっていた。入江伍長機は直掩機一機とともにリンガエン湾に飛んで、今度は帰ってこなかった。

㈤　皇魂隊の生存者吉村正夫

昭和19年12月25日。皇魂隊の双襲九機がフィリピン、クラーク中飛飛行場に到着した。

ところが、翌20年1月4日、同基地が空襲をうけて、桑原少尉、吉村伍長、小平伍長の三機が破壊されたのである。

三名はマニラへ代りの飛行機を受け取りに行ったがなかった。丁度そのころ連合軍がリンガエン湾に上陸を開始したため、マニラの陸軍航空各部隊は東方の山中に逃げ込んだ。三名も行動を共にしたが、皇魂隊で生還したのは吉村伍長と桑原少尉の二名だけであった。小平伍長は戦死したものと認められる。

特攻隊員を彷彿とさせる短歌

ますらおのかなしきいのち　つみかさね
つみかさねまもる　やまとしまねを

この歌のことは会報12号に書いておきましたがまだ特攻隊など現出しない昭和2年に三井甲之という歌人が、演習中に沈没した駆逐艦蕨に因んで詠んだものです。その歌碑が山梨県竜王町の山県神社にあるとて会員の窪川敏郎さんが撮ってくれました。

八月十五日靖國神社参道に会員の油絵が展示されます

8月15日10時30分～12時の間、靖國神社参道に張られた大天幕の中で、英霊にこたえる会と日本を守る国民会議共催の全国戦没者追悼中央国民集会が行はれます。英霊にこたえる会の御協力によって、その会場の横に我が会員の描いた油絵数十点が展示されますので、御覧下さい。なお8時30分から英霊にこたえる会主催の慰霊祭（玉串料五百円）、引続いて国民集会（無料）となります。両方に参加されること希望します

〈知覧慰霊祭記事関連〉

特攻の慈母鳥浜トメさんの町葬盛大に行はれた

5月15日知覧平和公園内の体育館に於て名誉町民として厳粛盛大に町葬が執り行われました。町の関係者はもとより国会議員、県会議員、町議会議員、県内各市町長、都城市長を始めとして偕行社関係、各地特操会、少飛会、航養会等五〇〇名に及ぶ方々が参列されました。

生憎特攻隊慰霊顕彰会会長並びに偕行社名誉会長であられた竹田恒徳元宮様の御葬儀と重なった為、東京よりは故人と最も関係の深かった57期星野善彦様に代表として参列して頂き、現地よりは同じく57期の中村善治様が参列されました。

誠に立派な大事な方を失い哀惜に耐えず心よりご冥福をお祈り申し上げます。

鳥濱トメ様のご逝去を悼みて

平和願ふ語り部となり君は逝く
特攻の御霊こぞり迎へん
吉田さち

観音堂の桜の花の散りし季を
逝きたまひしか慈母たりし君
高城和子

愛とまこと捧げつくしし君のひと世
勲は永久に特攻の母
佐多民子

（文責　最上　貞雄）

護国隊牧野顕吉君の特攻戦死を学友の大庭定男氏がBBCラジオで語る

幹候9期　岩田辰夫

この文章は、旧小樽高商時代の学友が、特攻戦死した牧野顕吉君に関し、BBCラジオで放送した要旨を、学友会機関誌「緑丘」に投稿したものを、鎌倉啓三氏の了解を得て転載した。

一、BBCのインタビュー

湾岸戦争が今にも始まりそうな昨年一月十五日、BBC海外放送（ラジオ）より『殉死（"Something to die for"）という番組の中で特攻隊のことを話して欲しい』という電話があった。

同級の牧野顕吉君がその一人であり、また、幸いにも緑丘誌に鎌倉啓三氏が道場七郎（昭十五卒）先輩について、中島泰明君が牧野君について書かれたものを持っていたので、これを参考にして『同志の特攻隊戦死者のことについてなら話せるが』と云うと『それは誠に好都合』とのことであった。そこで、道場先輩が故国を離れる直前に母親にあてた手紙を英訳してスタジオ（ブッシュ・ハウス）に出かけた。

インタビューは若い美人で声のよいアレンカ・ローレンスさん（スクリプト・ライター）との間に行われ、牧野顕吉君（陸軍・護国隊、昭和十九年十二月七日レイテ沖で散華）につき次のような話しをした。

○彼とは寮（正気寮）を共にしたが、直情径行、テニスの選手であった。

○ジャワ島バンドンでジャワ新聞（戦中発行されていた日本語新聞）で知ったが、その瞬間『ヤッター』と思った。

同時に私自身が生き永らえていることが恥ずかしくなった。この気持ちは年とともに強くなっており、墓場まで持ち込むことになろう。

○特攻隊参加は自由意思で何等の強制もなかった。

彼らが応募したのは『自分がやらなければ誰が出来るか』というノブレス・オブリージ（noblesse oblige 高い身分に伴う義務）に似た使命感からであった。戦前の日本では高等教育を受ける者は数パーセントしかなかった。

○特攻は優勢な連合軍に対抗するためには『一機一艦』で行くしかなかった。

○太平洋戦争については、私自身、オランダの植民地統治の実態を見、植民地解放の聖戦であると当時は信じていた。

しかしながら戦後四十五年の体験と勉強から侵略戦争でもあったことを否定できないと思うようになった。

二、全世界への放送

この放送はその翌日から始まった湾岸戦争のため無期延期となっていたが、九月二十九、三十の両日に三回に亘り全世界に放送された。

放送はまず、三百年位前にカナダでインディアンに虐殺された宣教師、一九六八年、ソ連軍のチェコスロバキア侵入に抗議して焼身自殺した学生など宗教や主義主張のため一命を棄てた人々の話から始まった。

これに続き飛行機の爆音、高射砲弾の炸裂する音の中に、道場先輩の手紙を男性のアナウンサーが抑制した声で読み上げた。母親への愛と感謝、自分の死を悲しまないで、達者で永生きして欲しいという切々たる手紙は特攻の悲劇性と隊員の清らかな愛国心を強烈に聴取者に訴えるものがあったと思う。

ついでローレンスさんの声で『戦後五十年、今やビジネス・コンサルタントとなっている大庭定男さんは級友の思い出を次のように話している』と上記の私の声を伝えた。

また、ルイ・アレン教授（旧英ダラム大学講師、東南アジアの戦史についての多くの著作あり、筆者の友人。十二月二十二日逝去）が次のようなコメントをした。

○特攻隊員は武士道の精神に則り、死ぬことの訓練のみを重ねた。

○国の為と信じて突入して行ったが、インテリであるだけに、中にはこの日記に『全体主義は民主主義には勝てない。イタリアとドイツが降伏したから次は日本の番だ』と日記に前途に対する疑問を書いて死んで行ったものも居る。

三、テープを母校へ寄贈

道場、牧野両氏戦死の直後、母校で追悼文集をつくり、遺族に寄贈されたものが四十年以上経ってから鎌倉、中島両氏の努力により発見され、昨年十二月六日、母校の図書館に贈呈され永久に保存していただくことになったが、その際、この録音テープも同様に寄贈された。

中島君の調査ではさらに同窓で数名の特攻隊散華者が居る。これ等の人々は丘の上の戦没者記念碑の中にその名前が刻まれている。

願わくは、一人でも多くの人々が追悼文集を読み、テープをきいて欲しい。そして再び丘に戻れなかった三百人近い同窓生を偲んで欲しい。

注①筆者大庭定男氏・陸軍経理学校第十一期生・「若松会員」ロンドン在住

②道場先輩、道場七郎（特操1期、八紘隊19・11・27・レイテ湾突入。

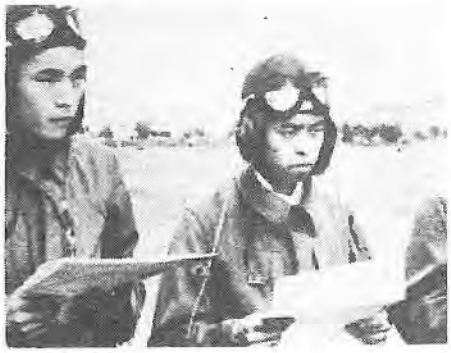
③鎌倉啓三氏・道場七郎君の学友・鎌倉市在住

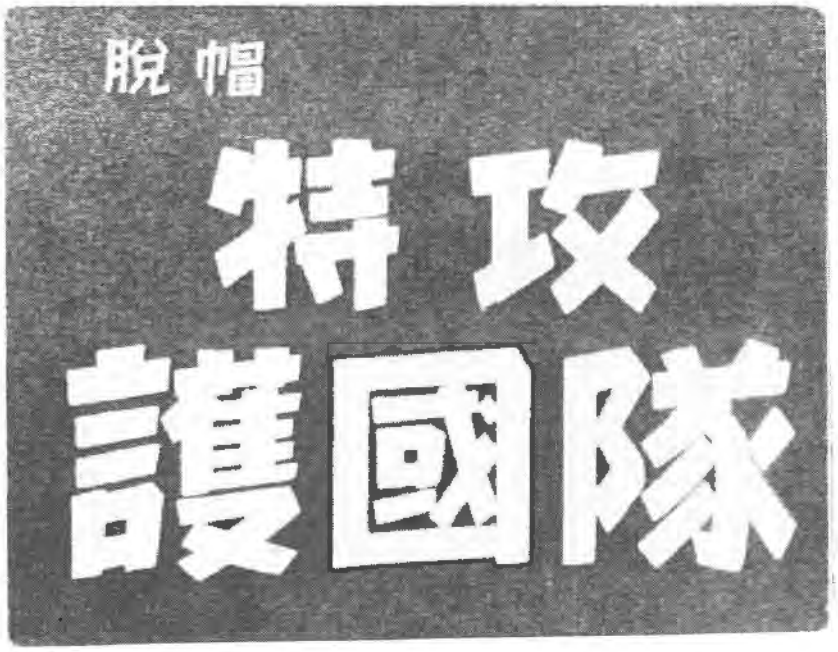
④中島泰明氏・幹候9期・牧野顕吉君の学友、小樽高商出身の特攻隊員の顕彰に尽力、新潟市在住。

（文責岩田辰夫）

19.12.15

ニュース映画





特攻戦死した同期生

菱沼俊雄
（航空上官学校56期）

平成3年3月2日、バスを仕立てて同期生三四名で「水戸つばさの塔」と「鉾田陸軍飛行学校顕彰碑」に参拝した。後日同期生の機関紙にこの日の行動や回想など取りまぜて投稿したが、その中で特攻に関することだけを取り出して本紙に載せてもらうことにした。

今回の「特攻同期生鎮魂の旅」に先立ち、改めて調べたところ、ミンドロ島で行方不明となった一宇隊・栗原恭一君、軍校の蘭花隊・春日園生君、ルソン島に不時着地上戦死の門口燁夫君（57期延期）を含めると、特攻同期生は48名の多きに達する。

このうち鉾田関係は14名。内訳は軽爆班（99双軽）が安藤浩・川島孝（転科）・沢田久雄・池内貞男・大沢正弘・佐藤睦男の6名。襲撃班（99襲・2式双襲）が、山本卓美・三浦恭一・松井浩・山本薫・広森達郎・高山昇・門口輝夫（57期）の7名。司偵が竹中隆雄1名である。また転科同期生は川島・三浦・竹中の3名で、竹中君は鉾田教導飛行師団に所属、司偵で出撃したらしい。

万朶隊の安藤・川島中尉は、19年10月26日、偶然、嘉義の飛行場で見送り、大沢・池内中尉は同部隊（34・208戦隊）で、共に空挺作戦の準備訓練をした仲。沢田中尉とは20年初頭、嘉義の飛行場で一緒。広森・佐藤中尉とは、沖縄作戦直前に岐阜で遭い、山本中尉の武揚隊は、私自身が誘導機として台湾へ同行、5月13日には八塊飛行場で其の出撃を見送った。当日の状況は「礎」第2集の拙文を御参照頂きたい。

今度の調査で初めて気が付いたことは、意外にも99双軽で特攻を行った同期生は一人も居ないという事実だった。万朶隊の安藤・川島両中尉は、攻撃に先立ち、富永第四航空軍司令官に申告のため、リパから99双軽でマニラへ向う途中、グラマンに撃墜され、可惜、岩本隊長、園田中尉等と共に戦死した。

沢田中尉は双軽の白虎隊（誠15飛行隊）長で、嘉義飛行場に待機していたが、20年1月14日、支那本土のB29が初来襲し、地上で爆死した。此の日、早朝、嘉義を離陸した私の編隊は無事だったのである。

池内中尉は皇華隊長として2式双襲で出撃、大沢中尉は薫空挺隊の作戦に海軍零式輸送機（DC3型）で参加した。また佐藤中尉も99襲撃機で沖縄の空に散華したのである。

所で旅の終りに地上兵科の某君から質問を受けた。「特攻隊は命令によるものか、志願によるものか？」と。この命題は高木俊朗氏の「知覧」や「陸軍特別攻撃隊」など多くの戦記でも論議された所である。其の実態は、鉾田で陸軍最初の特攻隊「万朶隊」が編成された時、当事者の一人であった佐藤博・澄谷両君の方が詳しいと思うし、個人の死生観にも関わる重大事なので、軽々に答えを出すわけには行かないが、強いて言えば、両者の併用であったと思われる。

これは編成された時機や場所、部隊の状況などで違うと思うが、要するに志願者の中から選抜下命するのが通例であろう。

20年の春、私の中隊に偶然、万朶隊の整備を担当した藤本春吉曹長と、富嶽隊の機関係として出撃、途中不時着して重傷を負い、基地に帰還した梨子田実曹長が配属された。其の話を聞くと、梨子田曹長は浜松を出発する時、未だ任務の性格をはっきりとは知らされていなかったようで、初期の特攻隊は上部でひそかに選考した場合もあったものと推測される。

ただ特攻隊員がすべて、何の迷いも無く、欣然として志願し、死地に赴いたかと言えば、其の答は否定的にならざるを得ない。下衆の勘繰りかも知れないが、如何なる聖人君子や英雄豪傑も、生存本能を持つ人間である以上、生への執着と死への恐怖を全く感じない人物は殆ど居なかったのではあるまいか。ただ修養研鑽により、それを克服出来るか否かが凡人との分かれ目と言えよう。

未熟者の私は恥ずかしながら、最後まで安心立命、不惜身命の境地には達しなかったように思う。ただ、観念的に大君の御為、祖国同胞のため、父母妹弟のため、喜んで死のう、と思う一面、犬死はしたくない、少しでも敵に損害を与えて死にたい、という気持が心底にあった。たとえば地上の航空兵は全く無能無力である。従って、地上で敵の射撃や爆撃に遭うのは怖かった。それが一度空中に舞上がれば猛然として闘志が湧く。

特攻隊は出現当初から、如何なる理由があろうとも、絶対に生還すべからずという不文律が出来て、片道燃料しか積まず、機上から爆弾を切り離す操作は不可能なように設計されていたという話も聞いた。其のため、たとえ発動機が故障しても、また天候不良のため目標を発見出来なくても基地に戻って再挙を期することが許されず、涙を呑んで海没した例もあったらしい。

これでは可惜、貴重な操縦者と飛行機を無為に喪失するのみならず、隊員の士気にも影響するであろう。優秀な隊員ほど、何度でも反復出撃して多大の戦果を挙げたいと願うであろうし、また妨害する敵機に対し、一矢も報いずして撃墜されることに無念の思いを禁じ得なかったに違いない。

事実、万朶隊の佐々木伍長は幾度か生還・出撃を繰返し、相当の戦果を挙げたと言われている。特攻隊長には優秀な人物が多かったが、中でも万朶隊の岩本隊長は、跳飛弾攻撃の権威で、軽爆隊の至宝と言われた人である。其の人選には誰もが強い不満と疑義を抱いたが、誰よりも不本意だったのは、岩本隊長御自身であったろう。聞く所によると、軍上層部が第一に最初の特攻隊は絶対に成功させなければならないと考えたこと、第二に生還の可能性を認めることにより、卑怯未練の風潮を助長し、攻撃精神の鈍化するのを恐れて、「軽爆の神様でさえ率先特攻を志願したのだから、皆必死必中の覚悟を固めるように」と指導するためだったとか。

話は変るが、特攻隊の慰霊祭に批判的な人も居て、「一般戦死者も特攻戦死者も、祖国の為に戦死したことに違いはない。靖国の神格に差別を設けるのは如何がなものか」と言う。確かに一理はあるようだが、壮烈無比の特攻を思えば、それだけでは割り切れない。事実、特攻隊の戦死者にも、本土防空でB29に体当たりをしたのに、明確な命課が無かった為に二階級の特進をしなかったとか、被弾した誘導機が敵艦に突入しても通常の戦死扱いと言った例がある。要は出撃時の心構え、覚悟の度合などの差から来ているのではないか。

つまり前述の如く、人間の生存本能に由来する生への執着と死への恐怖を絶ち切って、祖国の為必死必中の特攻を行うことは、100%の死を意味し、生還の可能性を残す99%の決死攻撃とは、「生命の維持」という観点から見れば、正に天と地の差がある筈である。譬えは悪いが、死刑と無期の差と言えようか。修養不足の私は、死生観の確立も出来ず、欣然として死地に赴く心境にもなれなかったが、常に皇軍将校として恥ずかしくない死に方をしたい、また中隊長として部下に笑われないような最期を迎えたいと念じ、いわばこの消極的な支柱を心の支えとしていた。

20年4月、99双軽で誘導機となり、2式双襲の特攻隊を台湾の桃園基地から沖縄の嘉手納湾に誘導し、敵艦隊の集中砲火で被弾、奇蹟的に生還したことがある。出発前、宿舎の厠で小用を足しながら、窓外の青空に浮かぶ白雲を眺め、不図、再び、此の空と雲を見ることが出来るだろうかと思った。それでも心の片隅では、必ず生還して次の任務に就くぞという希望を捨てなかった。矢張り必死と決死の差は無限である。特攻隊は別格ではなかろうか。特攻隊員の真情は特攻隊長だった澄谷徳朗君（誠25飛行隊・雄健隊）と小松利光君（誠16飛行隊・玄武隊）にしか分らないし、戦犯死刑囚の気持はモンテンルパの伊藤正康君のみが知っていると言えるだろう。

特攻隊慰霊顕彰会役員

竹田会長の薨去、秋山副会長、須田監事の逝去などに伴い、瀬島新会長のもとに次のような役員の構成になりました。

名誉会長	寺崎　隆治
会長	瀬島　龍三
副会長	田中　耕二
	内田　一臣
	高橋　正次
	鮫島　博一
	鈴木暸五郎
理事長	最上　貞雄（兼事務局長）
副理事長	小灘　利春
事務局次長	木村　元正
特別顧問	斎藤　義雄
	木村　茂
	大野　俊康
監事	小松　利光
	河村幸一郎
常任理事	伊藤　直之
	岩田辰　夫
	佐藤　彰平
	菅原　道熙
	田中　賢一
	菱沼　俊雄
	星野　善彦
	皆本　義博
	安田　義人
	山下季五郎
	和田　實
	上坂　康
	海老原善佐郎
	上田恵之助
	野崎　慶三
	野口　清三
	深堀　道義
	松井　明俊
	宮下　八郎
	山田　達雄

義烈空挺隊慰霊祭

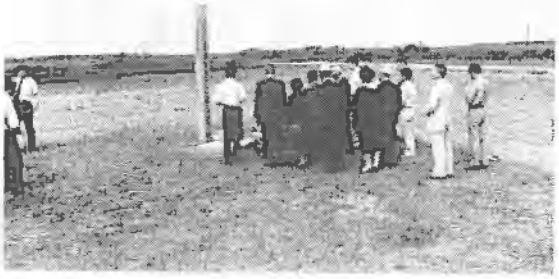
5月24日　沖縄摩文仁台上

この慰霊祭は全日本空挺同志会沖縄支部主催で、毎年5月24日（突入日）に最も近い日曜日に行はれている。今年はたまたま当日が日曜日となった。空挺同志会とは陸軍挺進部隊の戦友と自衛隊現職空挺隊員及び元空挺隊員とで構成された団体であり、沖縄支部員には昔の戦友は既に無く、以前空挺団に在職し現在は沖縄の自衛隊に奉職している十数名の現職自衛官だけである。支部長は先任者ということで、現在は沖縄地方連絡部長の山本一佐である。

当日午前は義烈空挺隊が突入した読谷飛行場跡を訪ひ、往時の面影を想像し合掌拝礼した。この地は現在米軍の演習場ということになっているが、黙認耕地とかで砂糖キビ畑が点在している。「義烈空挺隊玉砕之地」という木柱を建ててある。

慰霊祭は自衛隊音楽隊の支援を得て13時から行はれた。参列者は第三独立飛行隊の遺族二組と挺進部隊の戦友六人、沖縄及び習志野から来た自衛隊員に地元の奉賛者を加え全部で50名許りだった

やがては自衛隊員だけにならう。



第四十回特攻平和観音年次法要の御案内

次の通り執り行はれます。多数御出席下さい。直会等準備の都合ありますので。御出席の方は同封葉書で8月末日までにお知らせ下さい。

日時　平成4年9月23日14時

場所　世田谷山観音寺

世田谷区下馬4―9―4

・渋谷駅南口　㉒野沢龍雲寺行

・目黒駅西口　⑤三軒茶屋行

いづれも世田谷観音下車

尚御布施、年会費（未納の方）等郵送される方は同封振込用紙をご利用下さい。

右年次法要の際昨年同様に油絵等を展示致します。

本年は油絵のほかに墨絵、水彩画、版画、写真等も出して下さい。但し英霊顕彰の趣旨に合うものに限ります。出品なさる方は担当理事松本武仁に電話か葉書で申込下さい。

〒275　習志野市袖ケ浦235―102

電〇四七四―52―二八一七